

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00654

研究課題名(和文) 焦点化現象に基づく談話インターフェイス統語構造の実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research of the Discourse-Interface Syntactic Structure Based on Focusing Phenomena

研究代表者

西岡 宣明(Nishioka, Nobuaki)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：80198431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語における焦点化の統語的メカニズムとそれが関係している様々な文法現象を最新の生成文法理論(カートグラフィ、フェイズ、ラベリング)の枠組みで考察した。そして、焦点化がフェイズの周辺領域とどのようにかかわるのかを詳細に探究し、焦点化に関わる構造の精緻化とメカニズムを実証的に分析して、現象の解明と文法理論構築に寄与した。また、焦点化の働きの違いから、否定の作用域等の日英語の言語間の違いが導出できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間言語の本質を探究する生成文法の節周辺部の構造の精緻化を行うカートグラフィ研究と、ミニマリストプログラムのフェイズならびにラベリング分析に照らして、様々な焦点化現象にどのような機能範疇がどのように関与するのかを明らかにした。また、焦点化とは関係がないように思われる現象の背後にも焦点化が関与していることを示し、日英語間の違い、ならびに言語の理論的研究のおもしろさと奥深さを示し、文法理論構築に寄与した。

研究成果の概要(英文)： In this research, we investigated the syntactic mechanism of focusing and various grammatical phenomena related to it within the framework of the latest theories of the generative grammar ('cartography', 'phase', and 'labeling'). We explored how focusing relates to the edge of the phase and analyzed the structure and the mechanism empirically, contributing to the elucidation of the phenomena and the development of the optimal grammatical theory. It was also shown that differences between Japanese and English, such as the scope of negation, can be derived from the difference in the function of focusing.

研究分野：生成文法統語論

キーワード：焦点 カートグラフィ フェイズ ラベリング ミニマリストプログラム 生成文法

## 1. 研究開始当初の背景

言語における統語的焦点化の手段として、焦点化辞、焦点化移動、(擬似)分裂文を用いる方法があるが、その詳しいメカニズムに関しては明確になされてこなかった。また、近年、省略、削除現象の統語分析 (Merchant (2001, 2004, 2013), Johnson (2009), Winkler (2005)等) が盛んにおこなわれているが、ここで省略、削除を受けなかった要素には焦点化が関与していると思われる。この場合、間接疑問文縮約や空所化に代表される省略、削除現象には TP の上位にある C 主要部が関与し、VP 削除や、従来右方移動とされてきた重名詞句移動構文や右方節点移動構文には v 主要部が関与している可能性がある。C 主要部も v 主要部も、Chomsky (2000, 2001, 2005, 2007, 2008)により提唱されてきたフェイズ理論によると派生の単位であるフェイズを構成し、「フェイズ (C, v\*) がすべての統語操作を駆動する」というフェイズ理論の重要な主張 (Chomsky (2007, 2008))と照らした場合、この可能性の詳しいメカニズムを探求すると理論的に有意義な帰結が得られると考えた。そこで、(i) 焦点化にどのように CP/vP 構造が関わるのか、は重要な課題であり、また、近年の CP のカートグラフィ分析 (Rizzi (1997, 2002, 2004, 2006) により提唱、Haegeman (2000, 2006, 2012)等)で英語を含むヨーロッパ諸言語、Endo (2007)、Saito (2010, 2012) 等で日本語に関して展開) によると従来の CP はより細分化された構造であり、その一部に焦点化に関わる機能範疇が存在している。そして、もし、Chomsky が提案するように CP だけではなく vP もフェイズを構成するならば、(ii) カートグラフィ分析は CP のみならず vP に対しても適用できるのか否か、や、(iii) 近年の Chomsky (2013, 2015)が提案するラベリングの観点からこれらのフェイズはどのようなものであるのかが大きな課題であり、焦点化に関わる現象は、この点を明らかにする鍵となると考えた。さらに、問い返し疑問文(EQ)やメタ言語的否定(MN)のような対話者の発話を想定して、ある要素を疑問、否定の焦点として発する文は従来、語用論の研究領域で盛んに研究されてきた現象であるが (Horn (1989), Carston (1996), Iwata (1998, 2003), Noh (1998)等)、統語現象と密接に関わっている証拠が近年出されてきており (Sobin (1990, 2010))、談話とのインターフェイス構造に寄与する統語構造にはこれらの現象における焦点化のメカニズムも組み込む研究の必要性もあると考えた。従って、(iv) 焦点化に関わる機能範疇はカートグラフィ的にいかに階層化されるのか、またそこにどのようなメカニズムが働くのかを考察することは現象の解明のみならず、理論的にも有意義であり、さらに、(v) 焦点化現象は通言語的に (特に日英語間で)違いがあるのか否か、あるとしたらその違いをいかに導出するかが重要な課題であると考えた。これらの課題に焦点化に関わる様々な現象に体系的かつ実証的に取り組むことによって、統語論が寄与する談話とのインターフェイス構造はいかなるものかが明らかになり、最適の文法理論構築に貢献するものと考え、本プロジェクトを提案した。

## 2. 研究の目的

統語的焦点化現象の代表的なものは、焦点化辞、焦点化移動、(擬似)分裂文などを用いて焦点化を明示した文であるが、焦点化はより広範な言語現象の背後にある。省略、削除現象、さらには問い返し疑問文(EQ)やメタ言語的否定(MN)のような談話現象も焦点化が関与した現象である。また、通言語的に考察すると、焦点化が節の派生において様々な形で関与していることがわかる (Miyagawa (2010, 2017), Miyagawa, Nishioka and Zeijlstra (2016))。

本研究は、焦点化の重要性に着目し、次の3つを目的とするものである。

まず、①様々な焦点化現象を体系的に捉え、談話とのインターフェイス構造を明らかにするこ

とを目的とするものである。これらの個々の現象は従来、個別に焦点化と結び付けられてきたが、多様な焦点化を統語構造として体系的に明示化する試みはなく、本研究ではその体系的分析を目指す。

また、生成文法理論研究において、フェイズ理論とカートグラフィ分析は、近年注目を集め、それぞれの枠組みでの盛んな研究を生んできた。しかし、現在のところ、それぞれ独自に研究が進められているが、それらの相関を解き明かす試みは十分になされていない。(Chomsky, Gallego and Ott (2017)は、カートグラフィ分析に対して否定的見解を示しさえしている。)しかし、CP領域に異なる種類の焦点化が関わるような経験的事実があるとすると、理論的にいかに組み込むかが重要な課題となる。本研究はこの点を鑑み、②フェイズ、カートグラフィ分析の両方と密接に関わる焦点化現象を詳しく分析し、さらにラベリングからの考察を加えて、焦点化現象の種類とメカニズムを解明し、フェイズの内部構造と焦点化現象の核となる機能範疇を明らかにすることにより、最適の文法理論構築に貢献することを目的とする。

さらに、本研究は、③言語間（特に英語と日本語）の違いを焦点化に基づき考察し、体系化することにより、当該言語の構造と派生を解明することも目的とするものである。

### 3. 研究の方法

本研究では、研究目的の①②に応えるために、焦点化現象に基づき、CP領域の談話インターフェイスに貢献するカートグラフィ構造を明らかにし、ラベリング分析と整合するカートグラフィ構造を提示すると同時に、vP領域に関わる焦点化現象に基づき、vPフェイズのカートグラフィ構造の解明を試みた。また、研究目的の③に応え、焦点化現象に関わる日本語・英語間の言語類型的な違いの明示化を試みた。それらは以下の方法で行った。

・まず全員で現在の生成文法研究のフェイズ理論、カートグラフィ、ラベル分析についての動向を詳細に検討したうえで（理論的動向の共有と確認）、CP領域とvP領域の焦点化現象の区分、整理をおこなった（現象の整理）。

そして、以下の領域ごとの分担研究ならびに統括を行ない、適宜、学会発表、論文として公刊した。

- ・ CP領域研究・・・EQ、MNの分析（西岡）、省略、削除現象研究（前田）、焦点化移動、分裂文研究（黒木）、動名詞、不定詞研究（下仮屋）、ラベリング研究（大塚）
- ・ vP領域研究・・・動詞句内主語と焦点（西岡）、省略、削除現象研究（前田）、重名詞句移動（下仮屋）、動名詞、不定詞研究（下仮屋）、弱フェイズ、ラベリング研究（大塚）
- ・ 言語類型研究・・・各現象に関しては各分担者。日本語の方言研究に基づく分析（西岡）

### 4. 研究成果

まず、研究目的の①に関しては、Rizzi(1997)が提案した(1)のCPカートグラフィに基づき上記の分担に基づき研究を進めた結果、EQ、MNに関しては(1)のForceの上位に別の談話機能範疇(Echoic mention: EM)を想定した(2)に基づく焦点化として分析すべきであること(西岡(成果報告書所収))、また、日本語の断片質問(e.g. (A1:「宴会でみんな何を飲んだの」B:「由紀はビールを飲んだよ」A2:「隆は?」のA2)では、(1)のCP領域でのToPとFocが融合した構造(3)を想定すべきこと(Maeda(2018))、また、英語の分裂文の焦点要素は(1)のCP内焦点位置にあるのではなく、copular文のTP内にある(4)の構造を持つ可能性を焦点要素の移動ならびに寄生空所との並行性から明らかにした(黒木(2021))。さらに、動名詞構文を詳細に考察することにより、動名詞

構文には CP 投射はあるものの Topic/Focus に関する投射が欠如していることを明らかにし、そのことから動名詞では動詞句削除や TP 削除ができないことを示す一方、vP 投射に関しては定形節と同様の構造を持つために、Maeda (2014)が論じた CP 領域と並行的なカートグラフィに基づく構造(5)をもち、重名詞句移動や場所句倒置構文が可能であることを明らかにした (下仮屋 (2020))。これらはいずれも本プロジェクトによる新規の分析、提案である。

- (1) [<sub>ForceP</sub> Force [<sub>TopP</sub> Top\* [<sub>FocP</sub> Foc [<sub>TopP</sub> Top\* [<sub>FinP</sub> Fin [<sub>TP</sub> T...]]]]]]]
- (2) [EM EM [<sub>ForceP</sub> Force [<sub>TopP\*</sub> Top\* [<sub>FocP</sub> Foc [<sub>TopP\*</sub> Top\* [<sub>FinP</sub> Fin [<sub>TP</sub> T]]]]]]]
- (3) [<sub>Top-FocP</sub> XP<sub>i</sub> [~~<sub>FocP</sub> wh<sub>k</sub> [<sub>TP</sub> #<sub>k</sub> #]]]~~]
- (4) [<sub>TP</sub> it<sub>i</sub> T [<sub>v<sub>b</sub>P</sub> v<sub>b</sub>(be) [<sub>FocP</sub> XP<sub>j</sub> Foc [[<sub>PredP</sub> t<sub>j</sub> Pred t<sub>j</sub>][that...]]]]]]]
- (5) [<sub>AspP</sub> Asp [<sub>TopP\*</sub> Top\* [<sub>FocP</sub> Foc [<sub>VoiceP</sub> Voice [<sub>VP</sub>...]]]]]]]

また、研究目的の②に関しては、生成文法の最新の理論的道具立てである自由併合 (Chomsky (2015))、ラベリングアルゴリズム (Chomsky(2013))に照らしてCPとvPのカートグラフィ分析の問題点を考察し、より簡略的なカートグラフィ構造を提案した(大塚 (2020))。この研究により、時折対立的に捉えられる、自由併合分析とカートグラフィ分析は矛盾することなく捉えられ、焦点化、V2現象に関わる素性 (F素性)が2つのフェイズであるCP領域とvP領域において重要な役割を果たすことを論じた (大塚 (2020, 2021))。また、ラベリングの観点からは、前田の省略・削除研究、黒木の分裂文研究、下仮屋の動名詞研究、西岡の方言研究のすべてにおいてフォーカスに関わる現象におけるラベリング問題を考察し、カートグラフィ分析との整合性を踏まえた上で議論を構築した。これらの研究で共通して明らかになったのは焦点化におけるCPとvP内の焦点化素性のラベリングへの関与である。

研究目的③に関しては、日英語の否定の作用域を比較して、日本語の否定の作用域の決定には焦点化素性が重要な役割を果たしていることを熊本方言による証拠を用いて明らかにし (Nishioka (2018, 2019)、さらに、日本語の否定環境でのみ生起する表現を詳細に分析して、そこでもその生起には焦点化の具現化が CP 領域内か TP 領域内かが重要な役割をはたすことを熊本方言のデータを用いて明らかにした (西岡(2019))。そのことにより、話題・焦点といった談話素性が重要な働きをもつ談話配置型(discourse-configurational)言語としての日本語(Miyagawa (2010))と一致型言語としての英語の違いを明らかにし、言語類型的な考察にも寄与した。

以上の研究成果は、国内外の学会での口頭発表、ならびに論文の形で公刊し、最終年度で独自の報告書を作成した。本研究のように焦点化に関わる様々な現象をカートグラフィならびにラベリング分析を用いて統一的行った研究はきわめてユニークなものであり、文法理論研究へ相応の貢献ができたものと思われるが、本研究を通してさらに明らかになったのは焦点化素性の区分の精緻化の必要性である。vP 領域と CP 領域ならびにその上にある焦点化素性の意味機能上の違いと通言語的な違いについては本研究では十分に踏み込めなかったが、次の研究課題につながるものとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Maeda, Masako	4. 巻 vol.1
2. 論文標題 "The vP Cartography in Standard and Nagasaki Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学外国語学部論集	6. 最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Otsuka, Tomonori	4. 巻 32
2. 論文標題 "A Consideration on Pair-Merge of Arguments: From a Perspective of Experiencers and Superiority Effect"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 92-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚知昇	4. 巻 -
2. 論文標題 「カートグラフィとフェイズ理論の和解？」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第73回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 23-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下飯屋 翔	4. 巻 -
2. 論文標題 「分裂文の派生と焦点要素について」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語研究の楽しさと楽しみ	6. 最初と最後の頁 288-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木隆善	4. 巻 12
2. 論文標題 英語のIt-Cleft構文における焦点要素の移動について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州共立大学紀要	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西岡宣明	4. 巻 -
2. 論文標題 「話題・焦点化とWH-mo, XP-sika, Rokuna N」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 極性表現の構造・意味・機能	6. 最初と最後の頁 103-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maeda, Masako and Haewon Jeon	4. 巻 -
2. 論文標題 "Fragmentary Questions in Japanese and Korean"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of GLOW in Asia 12 & SICOGG 21	6. 最初と最後の頁 173-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Otsuka, Tomonori	4. 巻 36
2. 論文標題 "Labels and Roots"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 316-325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishioka, Nobuaki	4. 巻 87
2. 論文標題 "On the Positions of Nominative Subject in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 10th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAF10), MIT Working Papers in Linguistics 87	6. 最初と最後の頁 165-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishioka, Nobuaki	4. 巻 20
2. 論文標題 "On the Scope of Negation and the Position of the Subject in Japanese"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018 The Syntax-Phonology Interface In Generative Grammar: Proceedings of The 20th Seoul International Conference on Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 305-319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishioka, Nobuaki	4. 巻 14
2. 論文標題 "Discourse-Configurationality and the Scope of Negation"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nanzan Linguistics	6. 最初と最後の頁 25-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maeda, Masako	4. 巻 36
2. 論文標題 "Fragmentary Questions in Japanese"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maeda, Masako	4. 巻 29,1
2. 論文標題 "Feature-relativized Criterial Freezing"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Sato, Yosuke and Masako Maeda	4. 巻 37,1
2. 論文標題 "Particle Stranding Ellipsis Involves PF-Deletion"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Natural Language & Linguistic Theory	6. 最初と最後の頁 357-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Maeda, Masako	4. 巻 38,1
2. 論文標題 "Labeling in Inversion Constructions"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 91-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木隆善	4. 巻 -
2. 論文標題 「英語におけるIt-Cleft構文の焦点位置に関する考察」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第73回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 25-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 倒置と削除に関する labeling分析
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第73回大会シンポジウム英語学部門「焦点化現象に基づく統語構造研究」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下飯屋 翔
2. 発表標題 動名詞構文の派生について ラベル付けアルゴリズム分析と焦点化現象から
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第73回大会シンポジウム英語学部門「焦点化現象に基づく統語構造研究」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 Internal pair-Mergeに関する考察
3. 学会等名 日本英文学会第92回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 カートグラフィとフェイズ理論の和解？
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第73回大会シンポジウム英語学部門「焦点化現象に基づく統語構造研究」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 項の対併合に関する考察：経験主項と優位性効果の観点から
3. 学会等名 日本英語学会第38回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 Internal Pair-MergeとChain Headの決定
3. 学会等名 北海道理論言語学研究会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒木隆善
2. 発表標題 英語におけるIt-Cleft構文の焦点位置に関する考察
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第73回大会シンポジウム英語学部門「焦点化現象に基づく統語構造研究」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 「カートグラフィとマイクロパラメター」
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masako Maeda and Haewon Jeon
2. 発表標題 "Fragmentary Questions in Japanese and Korean"
3. 学会等名 GLOW-in-Asia XII & SICOGG 21 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 「等位接続されたwh疑問文とsluicingについて」
3. 学会等名 福岡理論言語学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 「長崎方言の敬語形態素と vP カートグラフィ」
3. 学会等名 メディア・コミュニケーション研究院 言語学ワークショップ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 「Pair-Merged ArgumentsとSet-Merged Adjuncts」
3. 学会等名 福岡理論言語学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大塚知昇
2. 発表標題 「左周辺部と外在化」
3. 学会等名 日本言語学会第159回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下飯屋 翔
2. 発表標題 日本英文学会九州支部第72回大会
3. 学会等名 「分裂文の派生と焦点要素について ラベル付けアルゴリズム分析とカートグラフィ分析の観点から」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nishioka, Nobuaki
2. 発表標題 On the Scope of Negation and the Position of the Subject in
3. 学会等名 20th Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Maeda, Masako
2. 発表標題 Feature-relativized Criterial Freezing: Evidence from Overt-Covert Movement Asymmetries and Multi-Criterial Movement
3. 学会等名 Workshop on Cross-linguistic Variation in the Left Periphery at the Syntax-Discourse Interface, as part of 2018 SNU International Conference on Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Maeda, Masako
2. 発表標題 普遍文法におけるパラメターの諸問題(Reconsidering parameters)
3. 学会等名 慶応義塾大学言語学コロキウム(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 日本語の疑問文断片
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Maeda, Masako
2. 発表標題 Fragmentary Questions and the Left Periphery in Japanese
3. 学会等名 The Second Joint Meeting of NGR and FLC(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Otsuka, Tomonori
2. 発表標題 A Reconsideration on Weak-Phases
3. 学会等名 The First Joint Meeting of NGR and FLC(国際学会)
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計3件

1. 著者名 遠藤喜雄・前田雅子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 244
3. 書名 カートグラフィー	

1. 著者名 澤田治他（編）西岡宣明（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 389
3. 書名 『極性表現の構造・意味・機能』	

1. 著者名 岡部玲子他（編）下飯屋 翔（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 523
3. 書名 言語研究の楽しさと楽しみ	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	大塚 知昇  (Otsuka Tomonori)  (20757273)	九州大学・言語文化研究院・助教    (17102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下仮屋 翔  (Shimokariya Sho)  (70746594)	産業医科大学・医学部・講師    (37116)	
研究分担者	前田 雅子  (Maeda Masako)  (00708571)	西南学院大学・外国語学部・准教授    (37105)	
研究分担者	黒木 隆善  (Kurogi Takayoshi)  (10751654)	九州共立大学・経済学部・准教授    (37101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関